

劇評 この一年間に観た舞台から

著者	松井 哲朗
雑誌名	Probe : 舞台芸術通信
号	9
ページ	28-35
発行年	2015-02
URL	http://id.nii.ac.jp/1136/00001259/

この一年間に観た舞台から

昨年的一年間に僕が観た舞台は、短編も含めて一三二作品、その他に映画やDVD鑑賞会などもある。一三二本とはずいぶんたくさん観たような感じもするが短編が多く、一日に五本とか八本などという日もあるのだ。

だが今年は正月早々に体調を崩して入院生活、その後余病の併発が続いて長期化し、その時期には多くの期待した舞台が観られなかったのはとても残念だった。

いつも言っているのだが、やはりもつと若い元氣な演劇愛好者や研究者が増えて欲しいと、この度は心底から痛感した。その意味では高校演劇大会に「生徒講評委員」という組織があるというのが大いに期待したい存在だ。

さて、この一年間に観た作品の中から最初に二五本を選び、その中の同一劇団は一作品に絞り、その上で八本を選んで観劇の日付順にご紹介したいと思います。

すべて『続・観劇片々』四四号、四五号、四六号、四七号からの選択・抜粋・要約です。

そして最初の二五本から割愛した一七本は最後に一言ずつ紹介をすることにしました。

松井哲朗（劇評誌「続・観劇片々」主宰）

演目 THE BEE

観劇日時／六月一四日

劇団名／風蝕異人街

劇場名／シアターZOO

原作／筒井康隆『雫りあい』

共同脚本／野田秀樹・Colin Teevan
演出／こしばきこう

白昼夢の儀式のような不気味な暴力の連鎖

六歳の息子の誕生日プレゼントを買って少し帰宅が遅くなったエリートサラリーマンの井戸は、息子とその母の待ちわびる自宅の目前で警察の規制線に阻まれた。

犯罪容疑で留置中に留守宅の妻の不倫疑惑に怒り狂った小古呂吾郎が、警官を射殺して脱獄し井戸家の留守宅に進入して妻子を人質に立て籠もっているのだ。

マスコミのマイクとカメラに取り巻かれた井戸は、百宝山警部に、自分が犯人の妻子の説得に行くことを申し出るが、警察は面子に掛けて許可しない。

井戸は隙を見て一人の警官をバットで殴り倒し拳銃を奪ってマスコミに案内をさせて犯人の留守宅・小古呂家へと入り込み逆に立て籠もる。

松井哲朗氏の「続・観劇片々」のサイト
<http://www.mmjp.or.jp/ragu/matsui.html>

小古呂の妻はストリップパーで、夫の吾郎をすでに見限っているが、六歳の息子・六郎を熱愛している。偶然に六郎も今日が誕生日だ。

井戸は百百山警部と取り引きし、警部を介して吾郎と電話で通話する。吾郎は息子の六郎にも偶然井戸と同じブレゼントを盗んで用意していた。

ここからは全て犯人の吾郎の留守宅での、犯人の妻と拳銃を擬した井戸との、息子・六郎を挟んだ駆け引きになる。

夜になると井戸は妻に食事の用意をさせる。夜に並んで寝るとSEXをする。朝、起きると妻は井戸の上着にアイロンを掛ける。井戸は洗顔し、三人で妻が準備した朝食をとる。夜になる。この繰り返しが続くと描かれる。

その中で井戸は妻子解放の要求の為に、吾郎の息子の指を一本ずつ切断して、百百山を通して留守宅に届けさせる。すると逆に吾郎は井戸の息子の切断した指を送り返してくる。ついには妻の指も一本ずつ切られ、最後には妻は立ち上がれなくなる。

この儀式のような白昼夢のような、エスカレートする暴力の連鎖が不気味に延々と続く。

エリートサラリーマン井戸役は女優であり、犯人の妻と六歳の息子は二人とも成人男優である。SEXの後には井戸は拳銃を天井に向かって発砲し、トランペットの祝曲がなり響く。

いずれも抽象的で様式的な表現方法だが、現実的であり得ないようである。逆に不気味な圧迫感が強い。「風蝕異人街」独特の様式化がピタリと合った凄まじい舞台

であつた。少々の疲れも吹っ飛び、爛々と見据えた一時の間半であつた。

演目 OUF!

観劇日時／七月二一日

二度目の観劇日時／七月二七日

劇団名／どくんご

劇場名／犬小屋テント劇場@札幌・円山公園自由広場

二回目／犬小屋テント劇場@旭川・神楽岡公園広場

脚本／根本コースケ 構成・演出／どいの

文明批判の衝撃的な笑劇

『どくんご』の今日の舞台は、男女六人の役者が一人ずつ、それぞれの心情を独白するという形で展開される。演劇とは人と人、あるいは人と社会との葛藤の成り行きとその結果を見せることだと思ふ僕の思いとは違ふ表現なのだ。

『どくんご』のこの舞台は、個人個人の思いを拡大・誇張して面白く滑稽に述べる一種の話芸なのだ。場内は哄笑・爆笑に包まれる。

『OUF!』というタイトルはUFOを想起させる、つまりこの舞台の主題は、宇宙空間に起こり得べき未来の問題を提起しているという大袈裟だろうか？

様々な、おそらく最新近代の科学の粋を集めたような機器、実はそれらは廃品を再利用したような物なのだが、そういう道具を構えた宇宙服の人物たちが、あたかも宇宙遊泳のようなスローモーションで遙か彼方の舞台裏から狭い舞台に登ってくる。つまり宇宙時代の幕開け

が地球文明の繰り返しとして幕が開き、ラストで再現されるのは近未来を想定しているように思える。

宇宙空間の話は、近い将来の予測にも通じる。そこから派生して、現在の世界の経済や文化や外交のいざこざまで連想させるような話題が続出する。

だが、それは飽くまでも身近な話題を現実離れのした衣装を着用して話すから、現実味が全く感じられない、なのに笑って観て聴いている内に、何か異常な感覚に襲われるのだ。

現実離れのした表現で違う世界の話を自分勝手に喋っているはずなのに、しかもその喋り方は全体に絶叫調で、あるいは片言風、外国語風、吃音風、方言風など様々なバリエーションでやられると表現の多様性までも感じてしまうし、さらに様々な体技、例えば逆さで宙釣りになって喋ったり、脚立に凭れて危なく倒れそうになるところを間一髪救い上げたり、長いズボンの中に長い脚を履かせて背の高い天狗のようないでたちで現れたり、大笑いして観ているながら、それが何か危ふい存在と空虚な未来を予言しているような恐怖に襲われるのだ。

五〇年前のような卓袱台の上に旧いダイヤル式の黒電話機がある。ドテラ姿みたいな男が電話に出ると、相手は以前お世話になった宇宙の彼方の医者らしい。前のシーンで、そのやりとりが演じられている。普通に話しているのに電話の向こうの医者には顔色が見えるらしい。それが実は傍に置いてあった湯呑茶碗の色だったりするクスグリの後、突然、男の左肘に衝撃が走る。電話の相手の指示で、電話機を持ち上げて蓋のように開けると中には炊き立てのご飯が入っていた。一口食べると、

それは宇宙の彼方から送られて来た不味いご飯だった……未来の科学のプラス・マイナスの象徴か？可笑しなマンガチックな優れた新作SF落語のような一席だ。そういう恐ろしいが滑稽で不気味で不安さえも感じさせる異常な二時間だった。

演目 死にたいやつら

観劇日時／八月一八日

劇団名／弦巻楽団
作・演出／弦巻啓太

劇場名／ことにパトス

物欲丸出しに七転八倒する喜劇の真髄

大学教授の男が亡くなって四九日の法事。子供のいない未亡人、夫の教え子、彼女のボーイフレンドでやはり教え子の男、当時仕えていた家政婦、未亡人でもある故人の妹、そして大学の同僚らが故人を偲んでいる。

そこへ故人から委託された遺書を預かっているという弁護士が現れる。その遺書によると「自分を愛していたたった一人の女性がいる、その女性に隠し財産の約二億円を贈る」ということで、その相続人を確定する為に来たというのだ。

最初、穏やかに故人を追想していた人たちは、それを聞いて俄然豹変する。自分こそその該当者だと主張して、その決定的場面を再現する。これが滅法面白い。遺書に書かれている条件を再現すべく必死に悪戦苦闘する、そのシーンの連続が爆笑・哄笑の連発だ。これこそが喜劇の真髄だ。

自己本位の身勝手丸出しの欲望、それを一人ずつ繰

り返す可笑しさ……皆が去ったあと、最後に残った未亡人と弁護士の話でその遺言は二人が組んで仕組んだ計略だと分かっても観客はリアリティを感じているから違和感はなく無い。

冷静に考えれば、遺書に確定する指定相続人が明記されていないのは不自然で無効なのではないのかと思うのだが、それを越える欲望は、この舞台を観ていてごく自然に納得できたのは、演劇のリアリティの勝利であると思うのだ。

演目 つづく、

観劇日時／八月三一日

劇団名／yhs

劇場名／コンカリーニョ

脚本・演出／南参

極限の時代に、生が「つづく、」ことを祈る人たち

劇場入り口がいつもとは違って舞台裏の道具搬入口だった。殺風景な入場口になって一瞬思ったけど、この舞台は原因不明の異常気象で札幌が凍結して一〇〇年後の物語だから、その雰囲気を観客にも感じてもらう設定なのだろうかとも思う。案の定、殺風景な代用口ビエを入るといつもとは違った風景で舞台は装置が崩れていて、舞台一面にバラバラになった台本やフライヤーの類が散らばり、その中を踏み分けるように客席に進む。

一〇〇年後の札幌には、札幌復興局という行政組織があつて三〇〇人ほどの行政官が住んでいる。夏の一日、東京からTV局が現地実状の実況レポート取材に来た。

復興局の人たちは慣れているからそんなに寒くはな

いが、取材班の人たちは南極にでも来たような感じだ。主任ディレクターは札幌生まれで、彼の曾祖父は札幌で演劇をやっていたのだ。生まれ故郷への愛着の気持ちは強い彼・小林エレキは（この舞台では登場人物はすべて俳優の名前が役名になっている、リアリティ感を作ったのだろうか）その曾祖父が心残りであつたと思う最後の舞台を、この荒れ果てた劇場で再現したいと考える。

東京から同行した女優を説得し、取材班のメンバーと復興局の役人さんたちも巻き込んで、曾祖父が最後に上演する予定だった、チエホフの『三人姉妹』を演じることにする。

稽古が始まるが、全員が素人だから、現実と戯曲の区別がつかず難航する。小林は半ば強引に進める。

参加者の現実と『三人姉妹』の状況が被って舞台は迫真的に進行する。つまり凍結された札幌の進退窮まった現実と『三人姉妹』との相似形の在りようだ。

最後に電気系統のトラブルで停電になった時は、暗闇が札幌の将来の展望を暗示して衝撃的であつた。

真つ暗な舞台で不安な人物たちが、それでも何とか『二人姉妹』を演じようとする……札幌はどうなるのか？「生きて行こうよ」と言いつつ……「生」は「つづく」。東北大地震や広島豪雨被害を想起しつつ、それをも含めて今を生きている人たちの未来に対する覚悟を感じ

る。
居住が出来ない区域であるはずのこの地で、なるもと星来はどうやって具体的に生きてきたのか？復興局の生活実体は？取材班はどういう方法でやってきたの

か？ そういう様々な具体的な疑問を飛び越えて、説得力の強い感じるところの大きい舞台であった。

演目 さよならと言っ前に

観劇日時／九月四日

劇団名／シアター・ラグ・2003

劇場名／ラグリグラ劇場

作・演出／村松幹男

見掛けの煌びやかさの中の、未来の管理社会

幕が開いて照明が入ると、間口が狭くタツパ（＝天井）の低い舞台全面に黒い格子が立ち並び、中には妖艶な美女四人が観客に媚びを売る様子で蠢いている。フラフラと現れた酔っ払いの男は四人の女に目移りしつつ、やがて一人の女を指名して店内へ入って行く。

ここは郭であり女性が男性に性を売る店で、視覚的には蜷川実花の、廓を舞台に描いた映画『さくらん』を彷彿とさせる。

今日のこの舞台はその情景と雰囲気とを彷彿とさせて、酔っ払いの男は、オバサンと呼ばれるお女郎上がりで年増の世話係女性に案内されて奥の個室に消えて行く。

ここら辺りは僕の大好きな古典落語の郭噺で聴き知った知識の通りだ。だがこの舞台のこの格子の中に閉じこめられているこのシーンは、女性が人間としての存在を無視され管理されていることの象徴でもある。近未来の物語と言うよりは近過去の物語であり、もしかして現在にも起きている一種の管理されている人間の現実で

もあり、そして近未来にも起こりうる現象をも予知しているとも言えるのかもしれない。

シーンが変わると、深い奥行ききの舞台に設えられたお女郎さん五人の個室が、正面に一部屋と左右にそれぞれ二部屋ずつ見える。その中の一人・ミズキが病死した。なぜ亡くなったのか、どう処理するのかは描かれず、即刻に後を埋める新しいお女郎さんリナが入室する。

管理者であるオバサンは柔軟を装ってだが過酷に彼女らを統率する。楼主は全責任をオバサンに任せて善人を装いながらも過酷に搾取する。

それらの逸話が展開し、お女郎さんたちも何とか現状に安住するためには余り余計なこととは思えないが、当然に葛藤は噴出する。

楼主は気に入った女を次々に側室として傍に置き、女たちもそれを出世と思い忠誠を尽くす。その中をへらへらと上手く泳いでいる番頭。

女衞の男が、その現在の側室を見初めて駆け落ちを企む。女たちの日常の彼方に浮かび上がるその二人の陰影。新しい未来が待っているのか、あるいはその先は絶望なのか？ 静かに照明は薄れていき幕が降りる。

視覚・感覚に酔わせながら人間と社会の本質を炙り出す、演劇の究極の魅力だ。

お女郎さんたちの会話が裏付けの弱い観念的な台詞が多いのが気になったが、それは観念的に喋る役者の演技に問題があるのだろうか？

確かに裏付けの薄い台詞も役者の肉体を通せば納得のゆく生きた台詞に成るから、その逆も真かもしれない。思いつくのは『十二人の怒れる男たち』の台詞だ。

彼らは具体的な個人個人の日常の背景をさりげなく喋っている。観念的に喋るとおそろしく説明にしかならないだろうが、それを俳優の肉体が個性として喋ると具体的に彼らの日常の生活と思いが納得のゆく現実として観客には感じられるのだ。『十二人の怒れる男たち』は、その台詞の現実感覚が、その舞台の土台をさりげなく表現していることを、その『十二人の怒れる男たち』を上演した三つの舞台を見比べて良く分かったことの一つでもあったのだ。

だがこの舞台は、それを承知の上で、同じ「シアター・ラグ・2003」の過去の二つの作品『大きなきのこの傘の下で』と『君の瞳に王国は映るか』をバージョンアップし改訂し、未来を見渡そうとした作品であり、シアター・ラグ得意の視覚的效果が深い想像力を刺激する優れた良質で興行きの深い傑作だと思う。

演目 瀕死の王さま

観劇日時／九月一六日

劇団名／札幌座

劇場名／江別市・アートスペース外輪船

作／ウジェーヌ・イヨネスコ 翻訳／大久保輝臣

演出／斎藤歩

権威と消費文化の滅亡を象徴

架空の王国は今やまさに滅びつつある。かつては豪壮を極め一国を支配したであろう王の玉座は木製の骨だけになり王城もガラクタのような木片の集まりだけになっている。

家臣も今や、王妃と第二夫人の他には、侍医で学者、家政婦と衛兵の三人しかいない。しかもその五人も、すっかりやる気を失くし適当にその日を送っているような雰囲気。

そんな時、突然に王は死を宣告される。しかも残り時間はたったの一時間だ。当然王には信じられない。だが事実は冷酷に死に近づいて行く。慌てふためいた王は、何とか死から逃れようと狂気の抵抗を試みる。この経過が凄い。あらゆる手段を抗して徹底的に死の恐怖から遁走しようとする王と、現実を受け入れさせようとする五人の臣下たちとのやり取りが物凄いスピードで展開する。

王は過去の実績を語って免罪符を得ようとするが、そんなものは死に対しては何の役にも立たない。だが延々と語るそれらの功績は逆に世界を墮落させたことばかりなのだ。その中でちよつとビックリしたのは原発の功罪について語ったことだった。原作では当時の文明の矛盾を当時の現実でアイロニックに表現しているのを、今回は現在の状況に移し替えて具体的な現実の台詞に直してとてもリアリティを持つようになったのだ。

この舞台は、現代文明の矛盾を批判する意図が根底にあるようだが、僕はそれと同時にあるいはそれ以上に権威の崩壊を徹底的に曝け出す要素が大きいと思う。

だから王はそんな文明を作り出したために混乱して逃げ延びようとしながら死を迎えるが、それと同時に、そういう文明を作り出した人間の欲望の象徴として逃れられない死を苦しみながら迎えた話という印象が強い。とにかくエネルギーッシュでスピーディーで圧倒的に凄

い展開の舞台だった。

演目 アイランド・監獄島・

観劇日時／一月五日

劇団名／韓国 プロジェクト・アイランド

劇場名／シアターZOO

作／アソル・フガード 演出／ソ・ジヘ

エネルギーシユな闘争劇

政治的な思想犯で孤島の監獄に収容された二人の男の、監獄内での葛藤の展開。

収容所のコンサートで、『アンティゴネ』の演劇を上演しようとしたのは演劇人である思想犯のジョンだ。だが、たった二人でやろうとして混乱の挙句に暴力的に衝突しながらも稽古を続ける二人。特異な環境の中での特異な関係が延々と続く。

『アンティゴネ』の悲劇の主人公は、法を犯した彼女だけど、彼女にとっては肉親としての当然の行為だったのだ。「法」を決めたのは誰か？「法」は絶対か？「法」の上に神は在るのか？と論争する二人。アンティゴネと演じる彼の立場とのWイメージともとれる物語。

最後に、二人で演じられる『アンティゴネ』の物語が劇中劇として上演される。ウィストンの女役もあって、これが実に面白い。

韓国語が分からないから凄いエネルギーシユな台詞にリアリティがあるのか、もしかして様式的な表現なのかは良くは分からない。いままで観た韓国の舞台ってエネルギーシユだが様式的なイメージが強いのだ。ともか

く人間の生きている基本をストレートに表現していて逆に爽やかな印象なのだ。

演目 トップガールズ

観劇日時／一月一日

劇団名／千年王國 劇場名／コンカリーニョ

作／キヤリル・チャール 訳／安達紫帆

演出／小島達子

日常を肯定したい夢の世界

その道で一応本人が成功したと自負する六人の女性がある夜、集まってパーティを催す。いろんな国のいろんな分野の人たちだ。だが実はこの女性たちは既にこの世には居ない人たちなのだ。つまり幽霊であり、主催者の自己肯定を確認する為の妄想なのだ。各人それぞれ勝手に自分の人生を自己満足風に語り意気投合する。

場面が変わると、現代のリアルな日常生活だ。そこではさっきの女性たちが、自分では納得していないが必ずしもうまくいっていない日常の仕事や暮らしの状況がそれぞれ各個人ごとに、克明に明らかになってゆく。

つまり必死に生活しながら苦しみ耐えていく日常を納得させる場として、彼女等は憧れのパーティを夢見たのだらうか？ それぞれ一人一人の女優が、日常の生活と夢の世界の豪華な存在とを演じ分ける表現技術の巧さを堪能する。これが芝居の面白さだろう。

☆

最終で割愛した一七本の舞台のタイトル・劇団名と一言を紹介します。

『必殺! 花の剣』 「劇団・怪獣無法地帯」 一月一三日
神秘的なチャンバラシーンの魅力。リアリティと迫力。

『言祝ぎ』 「intro」 一月二五日
リアルだが象徴的で非現実的で独特な表現法。

『ダニーと紺碧の海』 「札幌座」 一月二五日
複雑な男女の心理関係をダイナミックに表現。

『鈍獣』 「座・れら」 七月二六日
人間たちの醜悪な一面と善良な一面。

『野村大一人芝居傑作選』 「野村大」 八月二日
一人芝居の新しい表現法。

『秋のソナチネ』 「札幌座」 八月四日と九日
一見、異常な現実には暖かいリアリティがある。

『あっちこっち佐藤さん』
「イレブン☆ナイン」 八月二日、九日
落語は業の肯定という世界が舞台に表現された。

『どみの』 教文短編演劇祭参加「オトコカオル」 八月九日
情報のマイナス要素を表現。コンテンポラリーダンス。

『春よ来いマジで本当に頼むから』

教文短編演劇祭参加「yhs」 八月九日
哀しい切ない大人に成りきれない人たちの哀歌。

『班女』 『葵上』 「近代能楽集」 より

「風蝕異人街」 八月三一日
三木美智代を中心とした独特な表現の魅力。

『カモメに飛ぶことを教えた猫』

「座・れら」 一一月二日
言葉が持つ理解し合う力。

『世界は嘘で出来ている』

「ONEOR8」 一〇月二七日
善意の嘘が世の中の絆を保っている。

『王女メデア』 「劇団・可変」 一一月一〇日

男と女、あるいは支配者と弱者の現実と象徴。

『禿の女歌手』 「札幌座」 一一月一五日

空虚な権威主義への揶揄。

『腐食』 「シアター・ラグ・203」 一一月二六日

殺人犯の心情展開描写の凄さ。細川泰稔氏の論考あり。

『枕のしたのしたの』

「演劇公社ライトマン」 一二月一三日
男の存在証明・存在意義。